

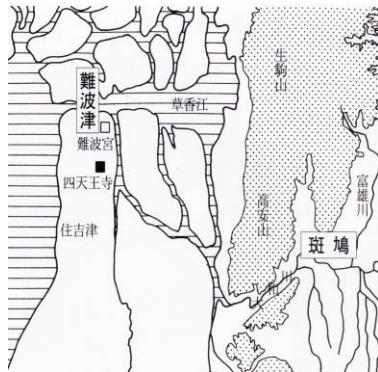
播磨の古代寺院と造寺・知識集団 48

難波四天王寺と百済の寺院

寺岡 洋

はじめに

四天王寺はあまりに有名なお寺なので取り上げるのを敬遠していましたが、1930年代後半から四天王寺は百済寺院と関連が深いと指摘されており、百済・新羅・播磨との関連をみてみたい。

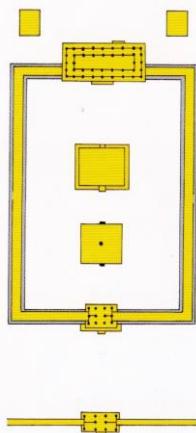


四天王寺の創建

四天王寺はいまさら言うのもなんですが、日本で建立された本格的な寺では最も初期の寺で、飛鳥寺（法興寺）→ 豊浦（とゆら）寺 → 斑鳩寺（法隆寺若草伽藍）→ 四天王寺の順に着工された。この四ヶ寺は連続して建立されており、寺院創建プロジェクトがあったのではないかとも推測されている。

四天王寺の創建については、『日本書紀』推古天皇元年（593）の記事に、「是の歳、始めて四天王寺を難波の荒陵（あらはか）に造る」とあり、難波の荒陵の地で着工された。北には難波津、南には住吉津が存在する。

荒陵という地名は周辺に古墳群が存在していたからであろう。同じような立地は播磨でもみられ、西条廃寺（賀古郡／加古川市）は西条古墳群の真只中に造られており、こちらは今も行者塚古墳（国史跡）など加古川河口の鹿子水門（かこのみなと）を抑えた有力首長の古墳が残る。



四天王寺伽藍配置

播磨と初期寺院の関連

高丘窯（赤石郡／明石市）で焼かれた軒丸瓦が約80km離れた豊浦寺講堂で補助的に使われている（豊浦寺ⅢE型式）。

四天王寺講堂跡で出土したヘラ描き沈線によって装飾された鷲尾（しひ）は高丘窯17号窯で焼かれた〔右図 井内2013〕。さらに、やはり講堂跡で出土した蓮華文帶鷲尾は峰相山（みねあいさん）古窯跡群・打越窯（姫路市）で焼かれたものである〔右上図〕。

また、豊浦寺は飛鳥寺とセットになる尼寺であるが、その尼僧一司馬達等の娘の嶋（善信尼）・漢人の夜喜の娘の豊女（禪藏尼）・錦織の壺の娘石女（惠善尼）一を得度させたのは、播磨に住んでいた高句麗人の恵便（えべん）

と者比丘尼（びくに）の法明であった。

恵便是脱衣の僧（還俗僧）と記されており、草堂のような小さな堂を建てていたのではないか、と妄想するが？

蓮華文帶鷲尾片 →



四天王寺造営の画期

四天王寺は飛鳥時代から現代まで法灯が続く稀な寺院であり、創建から平安時代初までの伽藍の変遷に4期の画期が想定されている〔網2015〕。

第1の画期 一 金堂・塔の創建

創建段階では、最も主要な伽藍である塔と金堂を南北に並べて建立した。出土瓦の様相から7世紀前半には塔と金堂は完成していたと考えられている。

金堂跡 金堂基壇は後世に3次にわたり再構築されており、創建期の基壇は明確にはならなかった。周辺から創建期の軒丸瓦（素弁ハ弁弁端に点珠）が多数出土していることから金堂の位置は動いていないと判断された。

塔跡 基壇上面より深さ3.6mの地点で創建段階の地下式心礎が確認された。周辺から金環（耳環）が2個出土しており、飛鳥寺心礎の例と似ている。ちなみに、現在建つ五重塔は8代目になる。

回廊はなく、木柵（板塀）だったようだ。

『日本書紀』推古天皇31年（623）の記事に、新羅（眞平王45年）が佛像・金塔・舍利・幡などを献上し、佛像を葛野秦寺（北野廃寺／京都市）へ、他のものを「皆、四天王寺に納（いれ）る」とあり、この頃までには寺としての格好はついていたようだ。

法隆寺若草伽藍（法隆寺境内に残る飛鳥時代の寺院址、現法隆寺は西院伽藍と呼ばれる）でも南北に並ぶ塔と金堂の基壇の掘り込み地業（地盤の強化工事）が確認されているが、やはり講堂・回廊の痕跡は検出されず、四天王寺と類似する景観であったようだ。

斑鳩寺と四天王寺は、塔と金堂を南北に並べるという百済寺院に特徴的な伽藍配置を採用している。蘇我馬子が建立を主導した飛鳥寺（588年に着工）は、一塔三金堂という高句麗にみられる伽藍配置で、同じく蘇我馬子が創建を主導した豊浦寺は、部分的な発掘であるが、泗沘（扶餘）の定林寺址に似た伽藍配置になる可能性があるとされる〔大西2014〕。

創建軒丸瓦（四天王寺NM I a型式）は、若草伽藍（4A型式）と同じ木型を使って瓦が作られている（右上 若草伽藍 右下 四天王寺）。范の痛みの進行状態から若草伽藍が先行しており、連續して着工されたことが確認でき、両寺の密接な関係を裏付ける。

建立を主導したのは厩戸皇子（聖德太子）とされる。難波吉士（なにわのきし）が主導したという異説もある。有力な知識集団として参加した可能性が考えられる。



百濟系渡来氏族が創建した野中寺（羽曳野市）と同范の忍冬文軒丸瓦が出土しており〔四天王寺1986〕、渡来系氏族・集団が多数集住した難波であるから、造寺や維持・運営など、様々な関りがあったであろう。

斑鳩寺と四天王寺は飛鳥京への玄関である斑鳩と難波にランドマークとして建立されたのではないか。

第2の画期 — 中心伽藍の整備

中門・回廊・講堂が完成し、中心伽藍が整う段階で、「四天王寺式」とよばれる伽藍配置が整う（前頁 伽藍配置図）。年代は7世紀中頃～後半頃とされる。

回廊が金堂の背後にある講堂に取りつくのが特徴で、播磨では下太田廃寺（鯛磨郡／姫路市）が四天王寺式で、前号で紹介した市之郷廃寺（鯛磨郡／姫路市）は推定四天王寺式で復元されている。金堂の背後（北側）で回廊が閉じる伽藍配置を「山田寺式」と呼んでいる。

中心伽藍の整備は、王都が飛鳥から難波長柄豊崎（ながらのとよさき 前期難波宮）に遷り、新しい都をグレイドアップする事業の一環と考えられている。四天王寺は上町台地に立地し、明石海峡からでも見えた？ 東側は大和への官道（難波大道）が南北に通過する。

『日本書紀』大化4年（648）の記事では、左大臣阿倍内麻呂（倉梯麻呂）が四天王寺の塔に、「佛像四軀（ほとけのみかたよはしら）」を置き、「靈鷲山（りょうじゅせん）の像（かた）を造る」とあるように整備が進められている。金堂には外敵調伏のため西向きに大四天王像が安置されていたらしい。唐・新羅を睨んでいた？

新羅の金春秋（武烈王 654年即位）が大化3年に難波に滞在しており、四天王寺を見たであろう。「春秋は姿顔美（かおよ）く、善（この）みて談笑す」とある。

この時期に主流として使われた軒丸瓦（四天王寺NM II a型式）は、百濟大寺（吉備池廃寺／桜井市）と同范関係にある。木型（范）が、吉備池廃寺→四天王寺→海会寺（和泉市）と移っている。

百濟大寺は、舒明天皇（639）、百済川の河畔に建立された大寺院で、「九重の塔を建つ」と特記されている。大匠（おほたくみ 棟梁）は倭漢氏の書直縣（ふみのあたひあがた）であった。百濟大寺は大王（天皇）が初めて建立した寺院であり、この時期の四天王寺は大王家ともなんらかの因縁があったのであろう。

余談だが、舒明天皇は同年の正月、有間温泉で過ごしている。当然ながら難波から有間までの道（有間道）があり、推定道沿いに猪名寺廃寺（尼崎市）が立地する。

猪名寺廃寺では、いわゆる「高句麗系」といわれる「豊浦寺V型式」と類似する軒丸瓦が出土しており〔上田2000〕、豊浦寺と関係あったのかも知れない。

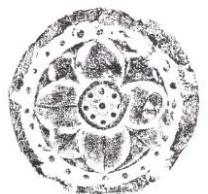
第3・第4の画期

第3の画期は、聖武天皇による後期難波宮造営にともなう伽藍整備の段階で、難波宮と同范瓦が使われている。

第4の画期は平安時代前期の大修造で、この時期に伽

藍全体に関わる何らかの修造が加えられたとされる。

第4の画期とされる時期でも後出する瓦に単弁四葉蓮華文軒丸瓦（NMVI d型式）があり〔右図〕、類似する軒丸瓦に出雲四王寺跡（松江市）出土瓦が挙げられ、年代は9世紀後半と推定されている〔網1997〕。



太寺（たいでら）廃寺（明石市）でも類似する軒丸瓦がみられ〔明石2013〕出雲の高句麗系の四葉文（四王寺）に系譜をもつものか、四天王寺と関連するものか、どちらであろう？ 太寺→



四天王寺式伽藍配置と百濟古代寺院との関係

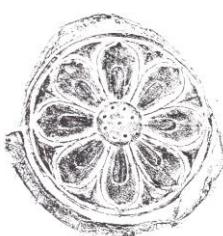
■ 伽藍配置 1935～36年に行われた軍守里廃寺（扶餘）の調査で、塔・金堂・講堂が南北に配置されることが確認され、四天王寺式のオリジナルが百濟の泗沘期（538～660）の寺院にあることが明らかになった。

2000年代、韓国において百濟寺院の発掘が進展すると、主要伽藍である塔・金堂・講堂が南北に配置される点は同じであるが、講堂の両側は回廊ではなく附属建物が存在すること、また、東西の回廊の北半部も別の建物であることが確認され、日本でいうところの「四天王寺式」とは異なる景観であったことが明らかになった。

網氏は、「四天王寺でも計画地割の段階では、講堂の東西は回廊ではなく別の施設を計画していたのではないかと考える余地がある」と指摘される。

孫引きであるが、「最初、地割周溝を設けたとき、実際に建物を造営したときとでは計画に変更があり、地割のときには講堂両脇は回廊とは性質が異なるものになるはずだったようにも考えられる」とある〔中村1991〕。

つまり、計画段階では現在見る四天王寺より、より百濟の寺院と似た伽藍配置であったようである。



■ 瓦積基壇 瓦積基壇は百濟の寺院でよく見られる基壇化粧である。四天王寺では中門と回廊南半で、外回り（外面）の基壇外装は切石積基壇であるが、内側は瓦積基壇と使い分けられていた。外から見えないとこで手を抜いたようである。百濟においても同様の例が扶餘・扶蘇山廃寺でみられる。中門と回廊の内外化粧が異なっており、同じ発想だったようである。

瓦積基壇は近江で盛行するが、四天王寺が時期的に先行しており、日本における最古になる可能性が指摘されている〔網2005〕。

木簡（付札）→
「那爾波（なにはの）連公（むらじのきみ）」

文献には倭と百濟の交流について多く記載されるが、考古遺物では扶餘双北里で出土した木簡が注目される。「那爾波連公」は、難波吉士であり〔平川2009〕、彼らは百濟都城泗沘で林立する寺院を見ていたであろう。



補注

■扶餘・軍守里廃寺の発掘について、「然るに是等の推定基壇のうち塔・金堂・講堂が南北の一直線に配され、其の塔・金堂をかこみて迴廊の連なる配置は、恰も内地の大坂四天王寺の規模と全く同規に出ずることに新たに注意せらるるものなり」と指摘されている。

石田茂作 1936 『飛鳥時代寺院址の研究』

■山田寺式伽藍配置

塔と金堂が南北に並ぶのは同じだが、回廊が金堂と塔を囲繞する伽藍配置を「山田寺式」と呼んでいる。講堂は回廊の外（北側）になる（下図では木立の後方）。

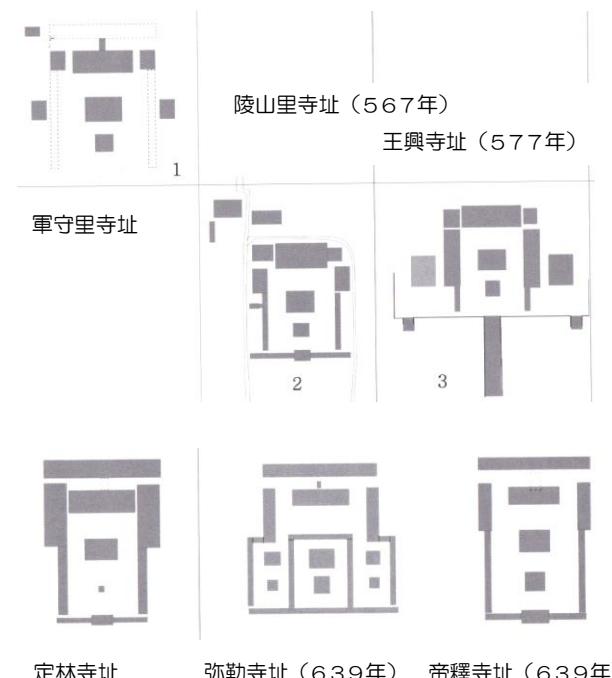


山田寺址（国特別史跡 桜井市）は興福寺で展示される「山田寺仏頭」が有名だが、建立についての経緯が『上宮聖德法王帝説』（平安時代中期）の裏側（裏書）に記される。舒明天皇13年（641）に、「始めて地を平（なら）す」とあり、整地作業が始まり、皇極天皇2年（643）に金堂の建立が始まっている。

「山田寺亞式」軒丸瓦

「山田寺亞式」軒丸瓦と呼ばれる外縁に特徴ある文様をもつ軒丸瓦が山背・丹波・但馬・播磨に分布し、山陰道・山背秦氏との関連が指摘されている。播磨では、河合廃寺（賀毛郡／小野市）・殿原廃寺（賀毛郡／加西市）、中西廃寺（印南郡／加古川市）でみられる。

■一塔式伽藍配置 *鄭子永2014より引用



■扶餘・扶蘇山廃寺 中門の瓦積基壇 西北隅部



古代を考える會 1976 『古代の日本と朝鮮Ⅰ』より

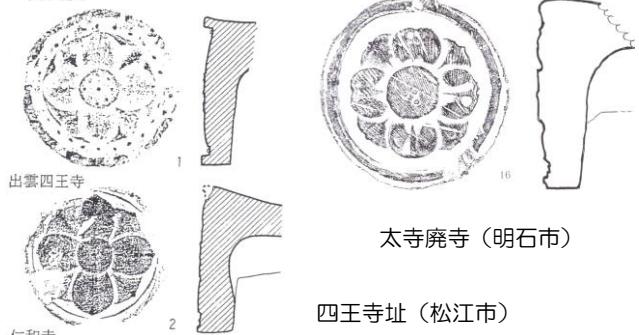
■忍冬文（にんどうもん）軒丸瓦

四天王寺西門周辺出土
河内野中寺と同范



■単弁四葉文軒丸瓦（NMVI d型式）と類似する軒丸瓦

大県廃寺（柏原市）



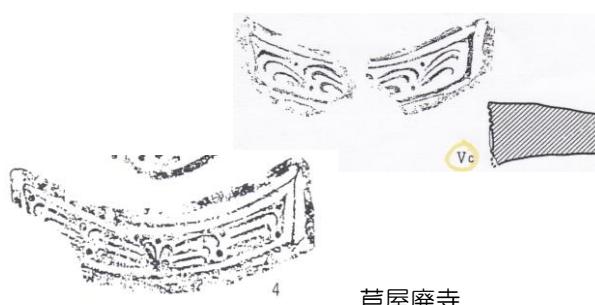
四天王寺出土の単弁四葉蓮華文軒丸瓦について、網氏は出雲四王寺跡出土瓦（上図）と類似することから、『日本三代実録』に記載された貞觀九年（867）五月の四王院建立に近い年代を想定されている〔網1997〕。

四王院は新羅調伏のために四天王像を安置した寺院であり、伯耆・出雲・石見・隱岐・長門に建立された。

太寺廃寺出土瓦（上図）は出雲・四王寺跡出土瓦と文様構成がきわめて類似する。

■瀬戸内海沿岸寺院と類似する軒平瓦

8世紀末とされる四天王寺出土の軒平瓦（NHVc型式）と同文の瓦が、**芦屋廃寺**（芦屋市）・**太寺廃寺**・**房王寺廃寺**（室内遺跡／神戸市）から出土している。奈良時代後半になると四天王寺と明石・神戸・芦屋など瀬戸内海沿いの在地勢力は連携していたようである。



芦屋廃寺

■引用・参考文献

- 四天王寺文化財管理室 1986『四天王寺古瓦聚成』柏書房
橿原考古学研究所付属博物館 1998『聖徳太子と斑鳩』
橿原考古学研究所付属博物館 1999
『蓮華百相一瓦からみた初期寺院の成立と展開ー』
橿原考古学研究所付属博物館 2001『聖徳太子の遺跡』
発掘された明石の歴史展実行委員会 2013『明石の古代』
＊＊＊
- 中村 浩・南谷惠敬 1991『四天王寺』ニューサイエンス社
網 伸也 1993「四天王寺古代瓦の再検討—平安宮
　　豊樂院同范瓦によせて—」
　　『ヒストリア』140 大阪歴史学会
網 伸也 1997「四天王寺出土瓦の編年的考察」
　　『堅田直先生古希記念論文集』刊行会
網 伸也 2005「日本における瓦積基壇の成立と展開—
　　畿内を中心として—」『日本考古学』20
網 伸也 2011「四天王寺伽藍とその出土瓦」
　　*古代寺院史研究会 資料
網 伸也 2014「古代の難波と四天王寺—飛鳥時代の寺
　　院関連遺跡を中心に—」『大阪春秋』153
網 伸也 2015「四天王寺伽藍の造営過程とその景観」
　　*日韓古代文化研究会 講演資料
佐藤 隆 1997「四天王寺の創建年代—土器・瓦の年代
　　決定をめぐって—」
　　『大阪の歴史と文化財』第3号 大阪市文化財協会
平川 南 2009「百済の都出土の『連公』木簡
　　韓国双北里遺跡1998年出土付札」
　　『国立歴史民俗博物館研究報告』第153集
上田 瞳 2000「摂河泉の高句麗系軒丸瓦」
　　『古代瓦研究 I』奈良国立文化財研究所
李炳鎬 2011「最近発掘された百済寺院の伽藍配置に
　　対して」 *古代寺院史研究会 資料
李炳鎬 2012「百済寺院の発展過程と日本の初期寺院」
　　『帝塚山大学考古学研究所報告』XIV
井内 潔 2013「明石高丘窯の屋瓦と鳩尾」
　　『帝塚山大学考古学研究所報告』XV
大西貴夫 2014「最新の研究成果からみた飛鳥の宮と
　　寺院—宮都空間の形成過程—」
鄭子永 2014「百済泗沘期伽藍配置の種類と変遷」
　　『百済と日本の寺院と都城』橿原考古学研究所
大脇 潔 2015「瓦からみた西摂の古代寺院」
　　『地域研究 いたみ』44号
- *『むくげ通信』 関連号数／発行年
- 235 2009.7 赤石郡一太寺廃寺、高丘窯跡群
247 2011.7 西播磨の蓮華文帶鳩尾
249 2011.11『出雲國風土記』の寺院を訪ねて（続）
　　*四王寺（しわじ）址（松江市山代町）は、『出雲國
　　風土記』に記載される「意宇郡（おうぐん）山代郷
　　（南）新造院」に比定されている。
258 2013.5「山田寺亜式」軒丸瓦と山背・丹波・
　　但馬・加古川流域
- *山田寺（桜井市）・北白川廃寺（京都市左京区）・
　　北野廃寺（京都市北区）・和久寺（福知山市）
259 2013.7「山田寺亜式」軒丸瓦と額部施文軒平瓦
　　*立脇（たちわき）廃寺・釣坂遺跡（朝来市立脇）・
　　三宅廃寺（豊岡市）・殿岡廃寺（旧村岡町）
262 2014.1 瓦積基壇をもつ古代寺院—播磨編—
273 2015.1.1 伯耆四王寺と山陰道の古代寺院
　　*「四天王に帰依し、災変を消却すべきこと」を命
　　じ、「賊境を望む高地に道場を設置せよ」とある。
　　伯耆四王寺址（四王寺山 171.6m）から新羅の
　　地は望めないが、眼下に広大な景観が広がる。
278 2016.9 西摂の古代寺院 I 猪名寺廃寺
280 2017.1 西摂の古代寺院III 芦屋廃寺・葦屋驛家